

研修報告書 No.30

研修先：梶原病院

今回は高知県梶原町にある梶原病院にて、1 か月間の地域医療研修を行いました。県外出身の医師として高知の地域医療に触れ、自病院とは大きく異なる医療環境とそこでの医師の役割を経験しました。

まず印象的であったのは、医師数の限られた環境で地域医療が支えられている現状です。梶原病院の常勤医は 4 名のみであり、他地域でも常勤医不在で非常勤医のみの施設や、実質的な無医地区もありました。限られた資源の中で、外来、入院、救急対応、在宅医療まで幅広く担っており、一人ひとりの医師に求められる総合力の高さを実感しました。また、高齢化率は高いものの、地域コミュニティの結びつきが強く、90 代でも自立して生活されている方が少なくない点は都内との大きな違いでした。住民同士の支え合いや家族の関わりが、健康維持に大きく寄与していることを実感しました。

研修内容は外来診療や処置、病棟診療、訪問診療などでした。特に終末期医療や在宅医療にも関わる機会が多く、地域医療の本質に触れることができました。膀胱癌終末期の患者さんに対する緩和ケアでは、症状緩和のみならず、本人・家族の心理的支援の重要性を学びました。また、入院後に感染を契機として心機能・腎機能が増悪し、看取りの方針となった事例では、病状説明と今後の方針に関するインフォームド・コンセントの場に同席し、医学的妥当性だけでなく、家族の理解や感情に配慮した説明の在り方について考えさせられました。さらに、心不全終末期の患者さんに対する訪問診療では、在宅酸素導入を行いながら自宅での支援を行いました。一方で、医学的には大きな問題がないものの、アルコール依存が背景にあり本人に治療意思が乏しい患者さんの退院調整にも関わりました。医学的管理のみでは解決しない社会的・心理的問題が地域医療では頻繁に直面する課題であり、多職種連携や地域資源の活用が不可欠であることを実感しました。

今回の研修を通して得た最大の学びは、医療というものは疾患ではなく生活背景まで含めたものという視点です。限られた医療資源の中で、患者さんの人生や価値観に寄り添いながら最善を模索する姿勢は、来年度より総合内科医に進んだ時に必要不可欠であると感じています。本研修で得た学びを今後の臨床に活かしていきたいと考えています。